

松浦莞二・宮本明子編著『小津安二郎 大全』

(朝日新聞出版刊、平成三十一年三月)

宮 本 明 子

小津安二郎は、黒澤明や溝口健二らと並ぶ日本映画の「巨匠」と謳われ、批評やエッセイも数多い。その一方で、台本やノートといった一次資料は、研究の対象となることがまだ少ない。こうした台本やノートには撮影前の加筆修正が施されていることがあり、小津の映画がどのような過程をたどり、製作されたかみえてくる。また、本書共編著者である松浦らの取材では、小津といえは五〇ミリレンズでの撮影が定説とされてきた中で、『東京物語』（一九五三年）など複数の作品に四〇ミリレンズが使用されていたこともわかってきた。各地での取材を経て、これらを書籍にまとめたいと考えた。

「大全」というと仰々しく聞こえるが、難解な書籍というわけではない。広く一般書として刊行するため、全編にわたり平明な記述を心がけた。

以下に各章を概観してみよう。

全七章には「取材集」「論考集」「資料集」、さらに伝記や事典が連なり、国内外の映画監督、俳優、音楽家、作家など、総勢五二名の取材者、寄稿者のことばが並ぶ。

第一章は「小津安二郎を聞く取材集」。プロデューサー・山内静夫を筆頭に、香川京子、司葉子、岩下志麻ら出演者へ、製作や現場での演技指導のようすを訊ねた。プロデューサー兼

「付き人」みたいなものだった、とユーモアを交えて振り返る山内は、『早春』（一九五六年）以降の小津の作品を、文字通り支えた人である。さらに音楽家・坂本龍一へのインタビューでは、これまであまり語られてこなかった小津の映画音楽に迫った。

第二章、「小津安二郎を知る 論考集 I」では、関係者が小津を語り、作家らが小津の作品との出会いを記す。現在活躍する周防正行や想田和弘ら映画監督は、十代の終わり頃や大学生の頃に小津をみたと振り返っている。まだ小津をみたことのない高校生や大学生が、こうした言葉に背中を押されることもあるだろう。出会いは多様であっていい。ときに退屈で難しいともいわれる小津の映画への入り口も様々であるはずだ。

第二章末尾を飾る四方田犬彦の論考では、かつて小津論を展開した自身を批判的に考察し、研究の限界が語られる。四方田が言及する小津の過酷な戦争体験に連なるように、続く第三章「小津安二郎を見る 資料集」では、小津が従軍した中国戦線で撮影された写真を並べている。長らく再掲載に至らず幻となっていた「中国戦線写真集」である。実際に撮影された四〇〇〇枚の中の現存する一部ではあるが、笑顔も写されている。小津

の映画には戦友たちが、諧謔やペーソスとともに彼らの経験した戦争を語る場面がある。それが戦後の小津の姿勢であったとすれば、戦地での小津はどうだったのか。従軍下の小津は、被写体となった彼らにどんな言葉を向けたのだろうか。

第四章、「伝記 小津安二郎」は当時の写真、同時代の世界情勢も併載する。既存の書籍から詳細をたどることが難しい小津の幼少期や家庭環境については、小津家や三重県松阪市の小津安二郎青春館、同館での研究会から教示を得た。

第五章、「小津安二郎を聞く 取材集 II」では、子役として『大人の見る繪本 生れてはみたけれど』（一九三二年）などに出演しながら、後年には録音技師として携わった末松光次郎らへインタビューを行った。『早春』（一九四九年）で原節子と笠智衆が京都旅行に出かける清水寺の場面では、当時は珍しい口ケでの同時録音が行われていることが明らかになった。また、田邊皓一への取材は、小津が多くの映画を製作した松竹に対して、東宝での『小早川家の秋』（一九六一年）撮影時を振り返る、貴重な記録でもある。

第六章、「小津安二郎を知る 論考集 II」では、それぞれ一九七〇年代、八〇年代に論考を発表した映画研究者・佐藤忠男、

デヴィッド・ボードウエルが小津を論じる。また、冒頭に掲げた四〇ミリのレンズに関して、松浦が映画撮影、映像製作を続けてきた立場からレンズの特徴にふれている。

第七章、「小津安二郎 全作品ディテール小事典」では、撮影、監督されなかった作品も網羅し、解説を付した。フィルムが残る作品は当該画像を掲げ、映画に引用された映画、歌詞や小道具などを紹介する。小津の演出や翻案を考える手がかりにもなるだろう。

以上各章から、小津とその作品の再検討を行った。本書では

詳述していない小津と作家の関わりや、調査対象とした一次資料個々の分析についても、今後調査を重ねていきたい。

(二〇一九年三月二七日 朝日新聞出版

五二二頁 四一〇四円)

【付記】

同志社女子大学日本語日本文学会より書籍紹介の機会をいただきました。御礼申し上げます。